

復礼法師の伝記とその周辺

一 色 順 心

唐代において仏典の翻訳をもっとも盛行ならしめた人は、高宗の時代の七世紀中葉に、厩大量の梵本を長安にもたらし新訳仏教を確立した玄奘三蔵（六〇二―六六四）であった。しかし玄奘の没後にも翻訳事業は継続され多くの翻經三蔵が続々と入唐している。とくに七世紀後半より八世紀初頭にかけては、則天武后が政治的実権を掌握した時期に相当し、仏教保護政策の下で国家的規模の仏典翻訳事業が行なわれた。高宗の儀鳳年間（六七六―六七八）の初めに地婆訶羅（六一二―六八七）が来朝して永隆元年（六八〇）ごろから經論の翻訳を開始した。それ以来、菩提流志、提雲般若、実叉難陀などの有数な翻經三蔵が洛陽及び長安において盛んに翻訳をなした。また長きに亘ってインドへ遊学し多くの梵本を將來した義浄（六三

五―七一三）も証聖元年（六九五）ごろより經典の訳出に従事している。これらの三蔵の訳場には夥しい数にのぼる中国人学僧が動員され、その中には当時の仏教教学者として有名な一流の学僧が加わっていた。

華嚴教学の大成者法蔵（六四三―七二二）も、武周朝期（六九〇―七〇五）を中心とした仏典翻訳事業に参加したその一人であるが、彼とほぼ同時代に生き、訳業において秀れた才能を發揮した人に復礼がいる。この生没年不詳の翻經沙門復礼は、地婆訶羅より実叉難陀に至る三蔵たちの訳出事業にしばしば重要な役割を果たし、訳場においては法蔵と同学であったと考えられる。また彼には『十門弁惑論』三卷や『真妄頌』の著作があることから、仏典の翻訳のみならず当時の仏教界を代表する思想家としての側面がある。従来より復礼に関して、地婆訶羅による『六十卷華嚴經』の補訳や、実叉難陀訳の『八十

『卷華嚴經』の翻訳事業に参加した人であること、及び真と妄の關係を當時の学界に問うたことによって、後代の澄観（七三八―八三九）や宗密（七八〇―八四一）等に少なからぬ影響を与えたことなどが注目されてきた。すなわち華嚴宗の所依の經典である『華嚴經』の翻訳に参加した一員として復礼がいたということは、間接的にはあるが華嚴教學の隆盛に基礎づけを与えた人物としてみることが可能ではなからうか。しかし復礼の仏教思想がひとつの教學にのみ属さず、従つてそれを樹立するほどの基盤をもたなかったために、華嚴教學の枠内の人とはみなされていない。いわば枠外の人とでもいふべきであるが、しかし、訳場において法蔵とともに翻訳に参加したこと、さらに、華嚴教學において重要課題とされた真妄の關係に、すでに復礼が『真妄頌』をもって世に問ひ正したという事実に至るとき、唐代の仏教研究、とくに華嚴教學の研究のうえには看過できない人物であろう。現存する彼の著作をみると、その作成の動機やその内容面において、いささか異質な性格をもち、しかもその二書が翻經沙門によつて著されたことになる。この多様な側面を有する復礼に関する研究は、これまで、『真妄頌』と後代の答頌に関する研究^①、及び『十門弁惑論』

の註解研究^②といった側面から個々に研究がなされてきた。しかし復礼の思想の全容を明らかにするためには、彼の伝記・交友關係・仏典の翻譯歴・著作に表われる仏教思想にまで亘つて考究することが必要であると思われる。本稿においては、各種の伝記資料や訳經目錄及び華嚴典籍に、断片的にはあるが表出する復礼の人物像を探索する中で、唐代の仏教界において復礼がどのような足跡を残し、また直接間接を問わず彼と関わりをもつた人々についてもその一端を考察することとしたい。

二

復礼とはどのような人物でありいかなる点に功績のあつた人かを略述した資料は、開元十八年（七三〇）成立の『開元釈教錄』と端拱元年（九八八）完成の『宋高僧伝』であるといえる。^③復礼伝に限つていえば、『宋高僧伝』の場合は『開元釈教錄』の記述を踏襲しつつこれを増広したものに他ならない。そこでまず『開元釈教錄』巻九に表わされる復礼の略伝をみることにする。

沙門復礼、京兆人、俗姓皇甫氏、少出家住興善寺。性虚静寡嗜慾、遊心内典兼博玄儒、尤工賦詠善於著述。俗流名士皆慕仰之。

三藏地婆訶羅又難陀等訳ニ大莊嚴華嚴等經、皆勅
召レ礼令ニ同翻訳、綴レ文裁レ義実属ニ斯人。

天皇永隆二年辛巳、因テ太子文学権無ニ述ニ釈典稽疑

十条ニ用以問レ礼請令ニ釈滯、遂為答レ之撰成二卷、名

曰ニ十門弁惑論。賓主酬答剖ニ析稽疑、文出ニ於智府、

義ニ於心外。如レ斯答對非、此而誰、可レ謂ニ龍猛更

生馬鳴再出。權文学觀ニ斯論ニ已、衆疑頓遣頂戴遵行。

此雖ニ一時之酬答ニ寔為ニ万代之龜鏡ニ也。法師兼有ニ

文集ニ行ニ於代ニ焉。(大正55・五六四b)

少くして出家した復礼は、長安の興善寺に住した僧で
あり、彼の学は内外典に通じ、もっとも賦詠にたくみで
あり著述をよく行なった。そして俗流の名士たちはみな
復礼を仰ぎ慕ったという。また地婆訶羅が『方广大莊嚴
經』を、実叉難陀が『華嚴經』を翻訳するにあたり勅命
によって復礼を召して、これらの訳出に参加させた。そ
の際、復礼は文を綴り義を裁める任に当った。また永隆
二年(六八一)に『十門弁惑論』が撰成され、問者権無二
がこれを読了したとき旧来の疑問がただちに解決された。
この論は人々にとって万代の龜鏡となるものである。略
伝の最後に彼の著述として『文集』^⑦という書物が流布し
ていたことが付記されている。『開元釈教録』卷九の所説

を要約すれば、(一)内外典に博識であった復礼が俗流の名
士たちに尊ばれていたこと、(二)仏典の翻訳にあたっては、
文を綴り義を裁めるといふ役割を果たしたこと、(三)彼に
は『十門弁惑論』という著作があつて仏教に対する疑問
を解決するためにもっとも手本となる書であること、の
三点になるといえる。

次に『宋高僧伝』卷十七「唐京兆大興善寺復礼伝」に
は、上記の(一)(二)(三)が『開元釈教録』の場合とほぼ同様な
文体によつて述べられているが、(三)については『十門弁
惑論』^⑧卷下の文を實際に引用しつつ権無二の疑問がただ
ちに解決したことを詳述している。復礼伝の末尾に『十
門弁惑論』が「外難の攻に酬うるにはただこの戈盾を用
いんかな」と性格づけられている。このことは『宋高僧
伝』が復礼伝を「護法篇」に編入したと密接に関係
するといえよう。復礼の伝記に關して『宋高僧伝』卷十
七には新たな二つの点が指摘されている。

作ニ真妄頌ニ問ニ天下学士。擊和者数人。当ニ草堂宗密
師銓択臻ニ極、唯清涼澄觀得ニ其旨趣ニ若ニ盧郎之米粒
矣。余未ニ体ニ礼師之見。故唐之訳務礼為ニ宗匠。故
惠立謂ニ之訳主。訳主之名起ニ於礼ニ矣。妙通ニ五竺ニ
融ニ貫ニ三乘、古今所ニ推世罕ニ倫匹。(大正50・八一二c)

これによれば、第一に、復礼は『真妄頌』を作成して当時の仏教界に広く真妄の問題を投げかけた。それに答えた人々が多くあった。宗密が銓択して、その中からもっとも極まった答頌をえらぶにあたって、ただ澄観のみが答頌としての旨趣を得ていた。第二に、仏典の翻訳における彼の地位について、唐代の訳務は復礼を宗匠となすものである。従って恵立は復礼のことを訳主とよび、その訳主という名称は復礼のときから名づけられた。彼は多くの言語に通じており翻訳の才能は抜きんでいた。『宋高僧伝』卷十七には、『開元釈教録』の略伝にはみられない新たな指摘がなされた。その点で、復礼という人物を知るうえには貴重な資料である。ただこの二つの指摘の内容について少しく吟味しておかなければならない。復礼が『真妄頌』を作成したことによってその問題に答えた者が多くあり、それらを宗密が銓択した中では澄観の答頌のみがその旨趣を得ていたという指摘について、答者としての澄観や銓択者としての宗密が、復礼の『真妄頌』とどのような関係にあるのが問題になる。周知のごとく、『真妄頌』は、単独の書物として現存せず、澄観の『演義鈔』卷五十八に載録されているものが現存最古の問題である。『真妄頌』の文が掲載されている諸

資料や答頌者たちの真妄論、及び澄観の真妄論については、すでに鎌田茂雄博士による論稿「真妄論に対する澄観の見解」に詳しく検討されている。そこには、義天の『円宗文類』卷二十一^①に所載の「安国寺利涉法師答」「安国寺洪滔禪師答」「雲華寺海法師答」「終南山草堂寺沙門宗密申明礼法師意」に基づいて、これらの諸師の答頌を、安国寺利涉に代表される法相宗の真如観と章敬寺懷暉に代表される禅宗の本来無一物の立場、これら二人に対して法性宗の立場からその思想を展開した澄観の立場というように分類せられている。六名の答頌者の中で、『宋高僧伝』卷十七「唐京兆大安国寺利涉伝」によれば、利涉とは、玄奘門下であるとされ、開元年中に安国寺において『華嚴経』を講じた人であるという。また章敬寺大徳懷暉とは、『宋高僧伝』卷十「唐雍京章敬寺懷暉伝」によれば、章敬寺にあって人のために禅要を説いた人で、元和十年（八一五）に六十二歳をもって没したことが知られる。その他の洪滔禪師と海法師については、禅門の人であると推察されるがそれ以外にはその紀伝は明らかでない。いうまでもなく澄観と宗密の場合、自著の中で確実に『真妄頌』に關説した文献が現存する。それに対して、利涉等の四師にはそれがないわけであるから、『真

妄頌』に各師が答頌を加えたという『円宗文類』の所説は、単なる伝承にすぎないといえるかもしれない。ただ利渉と懐暉の答釈は『円宗文類』にのみ表われるのではなく、宗密の『円覚経略疏鈔』巻七にも掲げられている点では、九世紀前半すなわち宗密が『円覚経略疏鈔』を執筆した時代には、利渉や懐暉の答頌として広く認められていたと考えられる。懐暉が八世紀中葉から九世紀初頭にかけて生きた人であるのに対して、それより百年ほど溯った時代に生きたと推定される利渉は、復礼の『真妄頌』作成時に存命であった可能性がある。後代の澄観・宗密・懐暉などの諸師の場合は、八世紀中葉以降、九世紀にかけて活躍した字匠に他ならないから、彼らが武周朝期に翻訳活動を行なった復礼法師と直接的な交渉があったとは推定しがたい。よって『真妄頌』という問頌が復礼の没後にも流布しており、澄観や宗密などの諸師が答釈を加えたと考えるほうがより自然である。各種の文献に残存する答頌のほとんどが、復礼の没後に流布していた『真妄頌』に対する答頌であるということは、復礼の『真妄頌』の一性格を物語るものであるといつてよい。

次に、復礼が仏典翻訳においてどのような地位を獲得

し、またいかなる役割を果たしたのか。『宋高僧伝』巻十七の復礼伝には、唐代の訳務が復礼を宗匠となすものであり、惠立は復礼のことを訳主とよんだという。唐代の仏典翻訳史上、それほどまでに高い評価が復礼という人物に与えられるであろうか。仏典翻訳に関する訳務には、訳主・筆受・綴文・度語・証梵本・潤文・証義・梵唄・校勘・監護大使などがあるが、中でも訳主という任は、訳場とそこにおける訳業の中心となるものであると考えられる。『宋高僧伝』巻三に、訳務についての各々に解説があつて、訳主という役割も次のように位置づけられている。

此務所司先宗_二訳主_一。即齋_二葉書_三之_二三藏_一、明_二練頭密_一二教_二者_一充_レ之。(大正50・七二四b-c)

翻訳の仕事において、まずもつて訳主は、もつとも重要となる任務であり、貝葉の書をもたらしたところの三藏であつて頭密二教に熟達した人こそがこれを果たすに足ることが、この文によって理解できる。つまり外来の翻經三藏及び玄奘や義浄などの代表的な翻訳家が訳主と称されるべきであろう。従つてこの訳主を明す項には復礼という名は見出せない。ただ、『宋高僧伝』巻三の証義の項に、

次則証義。蓋証^ニ已訳之文所詮之義^一也。如^下訳^ニ婆沙論^一・慧高道朗等三百人考^ニ正文義^一。唐復礼累場充^レ任焉。(大正50・七二四c)

と示されるように、梵文等の原語からすでに漢訳された文章の、その所詮の義を明証するという任、すなわち証義という任務に復礼があつたことが知られる。『宋高僧伝』の復礼伝には、復礼が五竺の言語に通じていたほどであると記されているが、翻訳の才能は充分にあつたにしても、訳主の任にあつたのではなく、実際は証義・筆受・綴文などを務めたと考えられる。訳場における復礼は、『開元釈教録』の記述のごとく、翻經三蔵のもとで文を綴り義を裁めることであつたといえるのである。

三

六世紀後半より七世紀初頭にかけて、とくに武周朝期に活躍した翻經三蔵のもとで綴文や筆受という訳務に復礼が携わつたことは、『開元釈教録』等の経録や『宋高僧伝』等の高僧伝類に、再三に亘つて彼の名が記載されていることによつて明白である。また彼と訳業をともにしたところの法蔵が、自らの著述の中に詳細な訳出事情を記述したのもある。例えば『華嚴經探玄記』に『六

十卷華嚴經』の補訳のことを、及び『入楞伽心玄義』に『大乘入楞伽經』の訳出の経緯が示されている。これらの資料には、復礼・法蔵をはじめとする多数の訳経僧が登場する。当時の訳場においては訳経僧同志の交流があつたのであろうが、訳経僧の間の師弟関係や交友関係にまで立入つた文献はそれほど多くない。法蔵が地婆訶羅から、天竺の那爛陀寺における戒賢・智光の論争について教示を受けた^②ときのような学問的交流は、復礼の場合には見出せない。翻經に関する諸資料を見る限り、そこには復礼という名と彼の訳務が記載されているにすぎないといえる。

訳場における訳経僧たちとは別に、復礼との交流がなされ、しかもその交わりによつて復礼の学風までも示唆すると思われる文献資料がないわけではない。それを挙げれば、(一)『景德伝灯録』巻四の鳥窠道林伝、(二)『宋高僧伝』巻五の道氤伝、(三)『釈華嚴教分記円通鈔』巻一における復礼と法蔵の逸話などである。(一)(二)(三)のいずれもがいささか後代に属する文献であり、それらが何に基づきどのような意図をもつて作成されたのか不明な点も多い。ともかくそれらは、復礼の人物像や学風の窺える資料であると考えられる。

鳥窠道林禪師（七四一—八二四）は、樹上に棲居したことから鳥窠禪師、鵲巢和尚ともいわれ、彼の晩年に白居易が師を礼謁して教えを受けた人として有名である。『景德伝灯録』巻四に、道林と復礼との出会いが、

九歳出家。二十一於荊州果願寺受戒。後詣長安

西明寺復礼法師、学華嚴經起信論。復礼示以真妄

頌俾修禪那。師問曰、初云何觀、云何用心。復

礼久而無言。師三礼而退。属唐代宗詔徑山国一禪

師至闕、師乃謁之遂得正法。（大正51・二30b）

と説示される。これによれば、道林は、二十一歳の受戒以後に長安の復礼法師を訪問し、『華嚴經』『起信論』を学んだ。復礼は人々に『真妄頌』を提示し彼らを修せしめていた。道林が復礼に対して、いかに観じ、どのよう^①に用心すべきかを問うたところ、復礼からは返答が与えられず、結局、道林は復礼のもとを退出していったという。このような記事は『釈氏稽古略』巻三にも同様に^②あるが、『景德伝灯録』の所説を承けたものであろう。ただしこれに先立って撰述された『宋高僧伝』や『祖堂集』における道林伝には、復礼のことは記されていない。道林は、武周朝末期より約六十年も後代の、代宗の時代以降に活躍した禪僧であるから、復礼の在世時に互いの

交流があったとは思われない。道林が西明寺の復礼のもとにおもむいたという事実関係は別にして、復礼が『華嚴經』『起信論』を説き、また『真妄頌』をもって人々を修せしめたという記事は、彼の学的傾向と指導のあり方を暗示するものとして注目される。

次に道氣（六六八—七四〇）は、唯識・因明・百法等の論に秀れ、とくに玄宗皇帝の代に重んぜられた人であり、開元十八年（七三〇）には道士尹謙と対論したことで有名である。彼には『大乘法宝五門名教』『信法儀』『唯識疏』『法華經疏』『御注金剛經疏』など多数の著作があったとされるが、『御注金剛般若經宣演』二巻のみが現存する。『宋高僧伝』巻五の道氣伝には、一行禪師（六七三—七二七）との関係も記されているが、それ以前に、道氣がその学識を広く認められるに至ったのは、復礼が道氣に対して『西方讚』一本を造れと命じたことから始まるのである。その経緯が『宋高僧伝』巻五に、
時^③有興善寺復礼法師、善属文。謂氣曰、籍汝少俊^④可^⑤為余造西方讚一本。遂襲紙援毫略不停綴、斯須已就、其辞典麗、清淨仏国境物莊嚴、臨文若現前矣。礼師誦訖願^⑥左右諸徳曰、奇才秀句吾輩莫能測也。自後服膺密案、昼夜精勵。弁給難

訓善於立破。礼師仰其風規、嘗於稠人広衆中、
宣言曰、氐之論端勢若泉涌。從此聞天供奉朝廷。
(大正50・七三四b-c)

と表わされている。道氐が作成した「西方讚」の出来ば
えが見事なものであったために、復礼自身が彼の奇才秀
句に驚嘆した。復礼はその風規を仰ぎ、かつて多くの聴
衆に対して、道氐の論端に勢のあること泉の涌くようだ
と宣言したという。道氐伝には、道氐の幅広い学識ぶり
が縦横に語り示されている。そこに登場する復礼は、道
氐よりも先輩にあたる有徳者として、しかも道氐の学識
に賛同しこれを認めた人として表現されているのである。
復礼が高宗や武後の時代のみならず、睿宗や玄宗の代ま
で存命であったか否かは速断できないが、道氐と重なっ
た時代に生きたという点では、比較的の記事としての信
憑性があるといえる。

高麗の華厳学匠である均如大師(九三三—九七三)は、
『積華嚴教分記円通鈔』卷一^⑩に、復礼と法蔵に関する逸
話を紹介している。その逸話の出拠については明確では
なくて、均如も、「古辞」、つまり、昔より言い伝えられ
た言葉にというような表現のしかたで紹介している。そ
の意味では多分に創作的な内容であって史実に乏しい感

がしないわけではないが、法蔵の「仮名菩薩」という教
義に復礼が批判的見解をもったことが、巻一に次のよう
に示されている。

古辞。章主大料簡中、明三乘極果不_レ信_二此_一經_二亦是
假名之義_三。世俗勝徳復礼師等便懷_二嫌嫉_一奏云。臣聞
无_レ上世尊三大劫中勤_二修_一万行_二登_二大_一覺位_二、無_レ上之上_一、
天中之天。法蔵抑挫為_二假名_一廿_一。此法師罪甚是不_レ少。
国法可_レ理。御勅擯_二於江南_一。

法蔵の「大料簡」の中には、三乗の極果であつても
『華嚴經』を信ずることがなければ、仮名の義にすぎな
いことを明している。この所説に対して嫌嫉を懐いた復
礼は、上奏して法蔵の罪の少なからざることを述べ、結
局、彼を江南へ擯出せしめんとした。熟頓の仏果に至っ
た者や、十千已過阿僧祇未滿の菩薩も仮名だといつので
あれば、三大劫に万行を修し大覺の位に登つた無上世尊
はどうなるのか。無上の上、天中の天なる世尊こそ真実
とすべきなのに、なぜ仮名なのが復礼には承服できず、
法蔵の仮名菩薩説を曲説とみなしたことが知られるので
ある。「古辞」とそれを引用した均如からみれば、法蔵
の仮名菩薩説が正鶴を得ており、遂に、事実を曲解した

のは復礼のほうであるという見地に立つことは当然のことである。復礼を登場させることによって、章主法蔵を語ろうとしたのである。それはともかく、「世俗の勝徳、復礼師等は便ち嫌嫉を懷き」という言葉から説き進められる逸話を通して、復礼という人は、仏典の翻訳や仏教の知識には精通しているがしかしあくまでも世俗の勝徳として取扱われているといえるのである。

結 び

武周朝期の仏典訳出に功績を残し『真妄頌』や『十門弁惑論』を著した復礼は、つねに学徳を具備した高僧としてみなされてきた。しばしば法蔵とともに訳場にあり、また澄観・宗密といった後代の華嚴教学に注目を受け、さらに内外典にも通暁していたという復礼に関して、その行歴を知るための十分な資料が残されているとはいえない。復礼の時代より後代の高僧伝や訳経目録を中心としてそこに表われる復礼の行歴及びその周辺を探索することは、多分に潤色されたところの復礼像に陥る危険性を孕んでいる。彼の行歴において確かであると考えられるのは、永隆二年（六八一）に『十門弁惑論』を撰じたことと、武周朝期の仏典翻訳に従事したことであり、これ

を基軸として、復礼伝が明証されなければならないのである。『十門弁惑論』における彼の仏教思想についても緻密な論究が必要であって、その思想内容と彼の伝記との脈絡が結ばれたとき復礼の人物像とその思想の全容が明らかになるが、その基礎作業として彼の伝記とそれに深い関連を有する交友者を掘り下げるにとどめたことになる。

復礼の人物像を闡明するために、その手掛りとして『開元釈教録』と『宋高僧伝』における復礼伝について検討した。それをまとめれば、復礼は、内外典に博識であって俗流の名士たちに尊ばれ、翻経においては文を綴り義を裁めるといふ訳務を果たし、彼の著した『十門弁惑論』が衆疑を解決する手本となる書物たることが二つの復礼伝に共通して明らかになる。しかし『真妄頌』に対して数人の学匠が答頌をもって答えたこと、復礼の訳務に宗匠とか、訳主という地位を与えたことは『宋高僧伝』において示されたのである。この中、『真妄頌』については、その文を載録した澄観の『演義鈔』や、答頌を掲載した宗密の『円覚経』註釈書類を参考にして贊寧が復礼伝に編入したとみることがもできる。数人の答頌の中では利渉を例外としていずれも復礼の没後に作成され

たと推定され、復礼と答頌者との間に年月の懸隔あることが『真妄頌』なる書の特質の一つであることが明らかになった。

復礼と師弟関係または交友関係にあった人々には、訳場における訳経僧や権無二がいたであろうし、利渉にもその可能性が残されている。また『宋高僧伝』『景德伝灯録』などの伝記資料や均如の『釈華嚴教分記円通鈔』には、復礼の学風等を伝えていると思われる記述がある。道胤との交流については、復礼と重なった時代に生きた点では、お互いの交渉があったとしても不思議ではない。鳥窠道林に関しては、俄かに史実として認め難いが、しかし、復礼が長安において『華嚴経』『起信論』を教えたといい見解は、彼の『華嚴経』翻訳や真妄の所説とも関係して興味あるものである。また均如が「古辞」を引いて法蔵と復礼との交渉に関する逸話を紹介しているが、それが史実でなかったにせよ、復礼が世俗の勝徳としてみなされていることは、復礼の人物像と符合する面があることが明らかになったのである。

註記

① 復礼の『真妄頌』とその答頌に関する研究には、脇谷攝謙「復礼法師の真妄頌」『六条学報』一二五号、明治45年

3月）、鎌田茂雄「真妄論に対する澄観の見解」『中国華嚴思想史の研究』五二五〜三七頁、昭和40年3月）などがある。

② 『十門弁惑論』に関する江戸時代の註釈書に、知空『十門弁惑論禪檢』（正徳6年）、臥雲『十門弁惑論纂述』（寛保2年）がある。

③ この他に復礼伝にふれた資料には『貞元新定釈教目錄』卷十二（大正55・八六四b〜c）があるが、『開元釈教録』の記述とほぼ同様である。

④ 永隆二年に『十門弁惑論』が撰成されたことは、復礼自身が『十門弁惑論』卷下に「于時大唐永隆二年歲次辛巳孟秋之朔日也」（大正52・五五九b）と記している。

⑤ 「二卷」とあるが、高麗本及び大正藏經所収本は上中下三卷であり、宋元明の三本は通して一卷とする。

⑥ 復礼が住した興善寺とは、大興善寺ともいい、長安城の靖善坊にあった寺院である。『長安志』卷七、足立喜六『長安史蹟の研究』二二〇頁（昭和58年6月、新装版）参照。

⑦ 『宋高僧伝』卷十七や『貞元録』卷十二にも『文集』という著作があったことを記すが、現存していない。

⑧ 「統_レ晨_レ覺_レ之_レ足_レ二_レ擊_レ混_レ沌_レ之_レ窟_レ、百_レ年_レ之_レ疑_レ一朝_レ頓_レ尽_レ。方_レ當_レ永_レ遵_レ覺_レ略_レ長_レ悟_レ迷_レ源_レ二_レ熱_レ煩_レ惱_レ之_レ薪_レ、餐_レ涅槃_レ之_レ飯_レ。請_レ事_レ斯_レ語_レ以_レ卒_レ余年_レ。」（大正52・五五九b）

⑨ 『宋高僧伝』卷十七（大正50・八一二c〜三a）

⑩ 澄観が載録した『真妄頌』の文は、「如_レ復礼法師有_レ遺_レ問云、真法性本_レ淨、妄念何由_レ起、許_レ妄_レ從_レ真_レ生、此_レ妄_レ安_レ可_レ止、無_レ初_レ則_レ無_レ末、有_レ終_レ必_レ有_レ始、無_レ始_レ而_レ有_レ終、長_レ懷_レ慳_レ」

斯理、願為開「秘密」、析之出「生死」(大正36・四六四c)である。

⑪ 己統一・二・八套・五・四一九丁左下

⑫ 鎌田茂雄前掲書、五三〇頁

⑬ 「欲遊震旦、結侶東征、至金陵、值一遇支婁三藏、行次相逢、禮求契度。」「開元中於安國寺講華嚴經。四衆赴堂、遲則無容膝之位矣。」(大正50・八一五a)

利涉については、牧田諦亮「唐長安大安國寺利涉」(『東方學報』第三一冊、京都、昭和36年3月)に詳しい。近來、敦煌文書の中から利涉に関する資料が発見されたことや、復礼の『真妄頌』についても閑説されている。

⑭ 「暉既居上院、為人說禪要、朝寮名士日來參問。」「元和十年乙未冬示疾、十二月十一日滅度、春秋六十二。」(大正50・七六八a)

⑮ 『円覚経大疏鈔』卷六之上(己統一・一四套・四・三三一丁左上)、『円覚経略疏鈔』卷七(己統一・一五套・二・一六〇丁右)

⑯ 己統一・一五套・二・一六〇丁右上

⑰ 惠立の伝記は『宋高僧伝』卷十七(大正50・八一三a)にあるが、その中には復礼について記述していない。

⑱ 『開元釈教録』卷九における地婆訶羅・提雲般若・実叉難陀・義浄の訳業を表わす箇所(大正55・五六三c)ハc)に、復礼の名が所出。

⑲ 『宋高僧伝』卷一「義浄伝」(大正50・七一〇c)、卷二「実叉難陀伝」(大正50・七二八c)九a)、卷二「地婆訶羅伝」(大正50・七一九a)、卷二「提雲般若伝」(大正50

・七一九b)に、復礼の名が所出。また卷五「法藏伝」には「実叉難陀齋華嚴梵夾三、同義浄復礼」訳「出新経」(大正50・七三二a)とある。

⑳ 卷一「今大唐永隆元年三月内有天竺三藏地婆訶羅、唐言日照。有此一品梵本、法藏親共校勘至此闕文、奉勅与沙門道成復礼等一訳出補之。」(大正35・一一二c)

卷二十一「是以於大唐永隆年、西京西太原寺三藏法師地婆訶羅、唐言日照。共京十大德道成律師等奉勅訳補、沙門復礼親從筆受。」(大正35・四八四c)

㉑ 「奉勅令共翻経沙門復礼法藏等、再更勘訳、復礼轉文。」(大正39・四三〇b)

㉒ 『華嚴経探玄記』卷一「又法藏於文明元年中、幸遇中天竺三藏法師地婆訶羅。唐言日照、於西京太原寺翻訳経論。余親于時乃問。西域諸德於一代聖教頗有分判權實、以不。三藏説云、近代天竺那爛陀寺同時有二大徳論師。一名戒賢、二称智光」(大正35・一一一c)

㉓ 大正51・二三〇b

㉔ 唐長安青龍寺道氣伝、大正50・七三四b)ハa)

㉕ 『均如大師華嚴学全書』下巻、四九〇五〇頁

㉖ 鳥窠禪師の項、大正49・八三二c

㉗ 卷十一「唐杭州秦望山円脩伝」(大正50・七七四c)ただしこの円脩という人を鳥窠禪師にあてているが混同がある。『国訳一切経』史伝部十二、二一四頁、脚註参照。

㉘ 卷三「鳥窠和尚」の項、柳田聖山主編『祖堂集』(中文出版社刊)五四頁

㉙ 玄宗が自ら著した『御注金剛般若経』に道氣が註釈をな

したものである。大正蔵八十五卷に所収。『宣演』二巻についての論稿に、平井有慶「敦煌本・道氣集『御注金剛經宣演』考」(印仏研究二二―一所収)があり、道氣の思想の形成と彼の仏教史上における思想的地位に言及が試みられている。その他、同「道氣と曇曠の唯識学」(『大正大学研究紀要』六一号、昭和50年11月)などもある。

③〇 復礼の生没年代を明らかにすることは、現存の資料による限り難しい。ただ、彼が存命であった時期は、翻経への参加時期との関わりにおいて考えることが妥当であろう。

開元四年(七一六)に善無畏が長安に入って以降、玄宗の代に密教経典の翻訳が盛んになるが、復礼はそれらの訳業

には従事していない。復礼の訳業は、神竜二年(七〇六)に菩提流志が『大宝積経』を訳し始めたときそれ以前に終わっていたと考えられる。

③① 註②参照。鎌田茂雄「釈華嚴教分記円通鈔の注釈的研究」(『東洋文化研究所紀要』八四、昭和56年3月)一五五―一六頁。

③② この逸話については『中国仏教史辞典』(東京堂、昭和56年9月)三三二頁「復礼」の項に「また法蔵の仮名菩薩という教義に反対し、法蔵を江南に擯出するように上書した」という逸話もある」というように解説されている。

③〇 復礼の生没年代を明らかにすることは、現存の資料による限り難しい。ただ、彼が存命であった時期は、翻経への参加時期との関わりにおいて考えることが妥当であろう。

開元四年(七一六)に善無畏が長安に入って以降、玄宗の代に密教経典の翻訳が盛んになるが、復礼はそれらの訳業

には従事していない。復礼の訳業は、神竜二年(七〇六)に菩提流志が『大宝積経』を訳し始めたときそれ以前に終わっていたと考えられる。

註②参照。鎌田茂雄「釈華嚴教分記円通鈔の注釈的研究」(『東洋文化研究所紀要』八四、昭和56年3月)一五五―一六頁。

この逸話については『中国仏教史辞典』(東京堂、昭和56年9月)三三二頁「復礼」の項に「また法蔵の仮名菩薩という教義に反対し、法蔵を江南に擯出するように上書した」という逸話もある」というように解説されている。

③〇 復礼の生没年代を明らかにすることは、現存の資料による限り難しい。ただ、彼が存命であった時期は、翻経への参加時期との関わりにおいて考えることが妥当であろう。

開元四年(七一六)に善無畏が長安に入って以降、玄宗の代に密教経典の翻訳が盛んになるが、復礼はそれらの訳業

には従事していない。復礼の訳業は、神竜二年(七〇六)に菩提流志が『大宝積経』を訳し始めたときそれ以前に終わっていたと考えられる。